

まえがき

この本を読んでいるみなさんは、毎日の生活のなかで“自分”が“自分”であることに対して疑問を抱くことはほとんどないでしょう。自分は自分であって、他の誰でもありません。朝、目を覚まして、洗面台で顔を洗って鏡をみるとおなじみの自分の顔が映ります。帰りの電車のガラス窓に映る自分の顔が朝より少し疲れているのに気づくこともあるかもしれません、やはり見慣れた自分の顔が目に見えます。眠りに就いて意識がない状態になっても、目覚まし時計の音が耳に入ったりすれば、自分の身体は自分に与えられた刺激に反応し、また目を覚ますことでしょう。自分の手や足はまぎれもなく自分自身のものであり、他者の手や足を自分の意思で動かすことはできません。自分の行動や考えは自分自身で制御できると感じ、映画の世界のように他者や宇宙人によってコントロールされることもないはずです。

このような自分に関わる身体や心の情報を、自分のものとして処理し、自己とそれ以外とを区別するという能力は、自分自身の“自己認識”によって支えられています。当たり前のように感じている自己認識ですが、それが精神疾患や脳の損傷によって失われることも知られています。たとえば、統合失調症の患者さんでは、他人に自分を動かされている感覚をもつことがしばしばられます。脳卒中や脳血栓や事故によって脳に損傷を負うことでも、自己認識の喪失や、当人の人格が急に変わるといった自己認識の変動が起こることもあります(Feinberg, 2001)。脳の損傷や異常によって自己認識に異常が起こることから、自己認識の大部分はやはり脳のはたらきによって生み出されているといえます。

そして、私たちは生まれてから死ぬまで自分一人だけでは生きていけず、他

者と関わりコミュニケーションを取りながら生き続けていきます。生まれたときには家族と、学校に行くころには友人と、大人になってからは同僚と。一日中引きこもって誰にも合わない日があっても、テレビをつければドラマが放送されていて、そこに他者を感じます。見知らぬ他者が溢れる人混みの中にいても、衝突を上手に避けて歩くことができます。

他者との関わりを切っても切れない私たちは、自分のまわりにあふれる他者を認識するために必要な能力をもっています。私たちの脳は、他者を単なる物としてではなく、特異的に処理していることがさまざまな研究により示されています。この脳の機能により、他者が何者であるのかを認識することができます。他者がどのような動きをしているのかを知ることができます。他者の動きを見て何を考えているのかを推測することもできます。ときに、他者と同じような気持ちになったり、他者と同じ仕草をしてしまったりするのも、脳に潜む機能に由来しています。では、脳のどのような機能が他者の動き、意図や感情の理解に関与しているのでしょうか。そして、他者の情報と自己の情報を混線させずに処理するシステムはあるのでしょうか。

脳の神経回路は膨大で複雑でややこしく、道に迷うこともあるかもしれませんし、同じところに戻ってきて結局到着するところもないかもしれません。たくさんの研究者が自己と他者を知る神経回路の解明にチャレンジしています。彼らの研究や実験をヒントにしながら、脳の中に広がる他者と自己を知るための地図をいっしょに探しにいきましょう。

謝 辞

この本を書くにあたり、多くの方々にご協力をいただきました。国立精神・神経医療研究センター、微細構造研究部の鈴木 航先生と安江みゆき先生には研究の様子がよくわかるイラストを提供していただきました。原稿を読んでくださった野口 潤先生からは、的確なコメントをいただいたおかげで、本巻を学術的にしっかりとした内容に仕上げることができました。麻布大学大学院の小林 愛さんと中村月香さんからは動物の情動伝染や共感について、知見をご教授いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、本巻執筆の機会を与えてくださいり内容や構成についてアイディアを下さった一戸紀孝先

生、有意義なアドバイスやご指示を下さった編集委員の市川眞澄先生、最後まで励ましの言葉をくださり執筆を支えていただいた共立出版編集部の山内千尋さんと三輪直美さんに深く感謝致します。

浅場明莉